



夾竹桃物語 わすれていて ごめんね —— 画・文 緒方 俊平
Drawing & Writing SHUMPEI OGATA

わすれていて ごめんね

— 夾竹桃物語 —

夾竹桃物語 わすれていて ごめんね
Drawing & Writing SHUMPEI OGATA

クスの木にハトやカラスがいっぱいとまっていました。
みんな、下の広場を見つめています。

広場では人間の子どもたちが
平和の鐘かねをついていました。





広場では総理大臣や市長が
平和を守る話をしていました。
広場ではたくさん的人が
平和のために祈っていました。
げんしょくだん
原子爆弾で死んでいった
人たちの命に祈っていました。

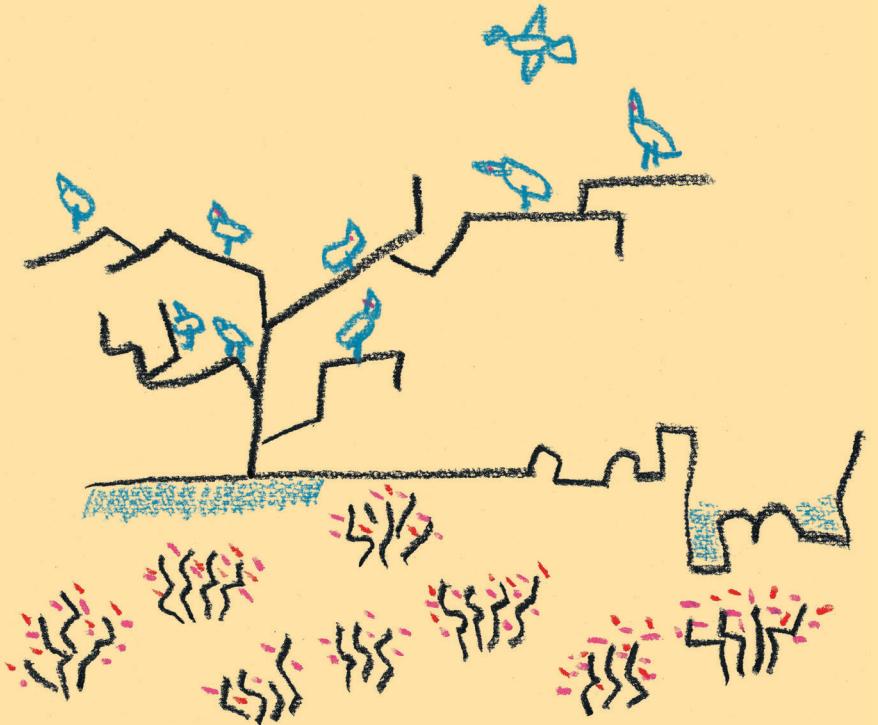
ハトやカラスは、しづかに
この広場を見つめています。
八月六日にはいつも見つめます。
もう、六十回目の夏がきました。
六十回、見つめました。
広場の人間の話を
じっときいていました。

「また今年も、わすれられたね」
「うつぶやいて、ハトがうなだれました。
カラスもうなだれました。



「人間はまだ気がついてくれないんだ」

「わたしたちの仲間も、みんな原子爆弾で死んだのに
わすれられた悲しみに、みんなだまってしまいまして。
風がザワザワとクスの葉を鳴らしました。



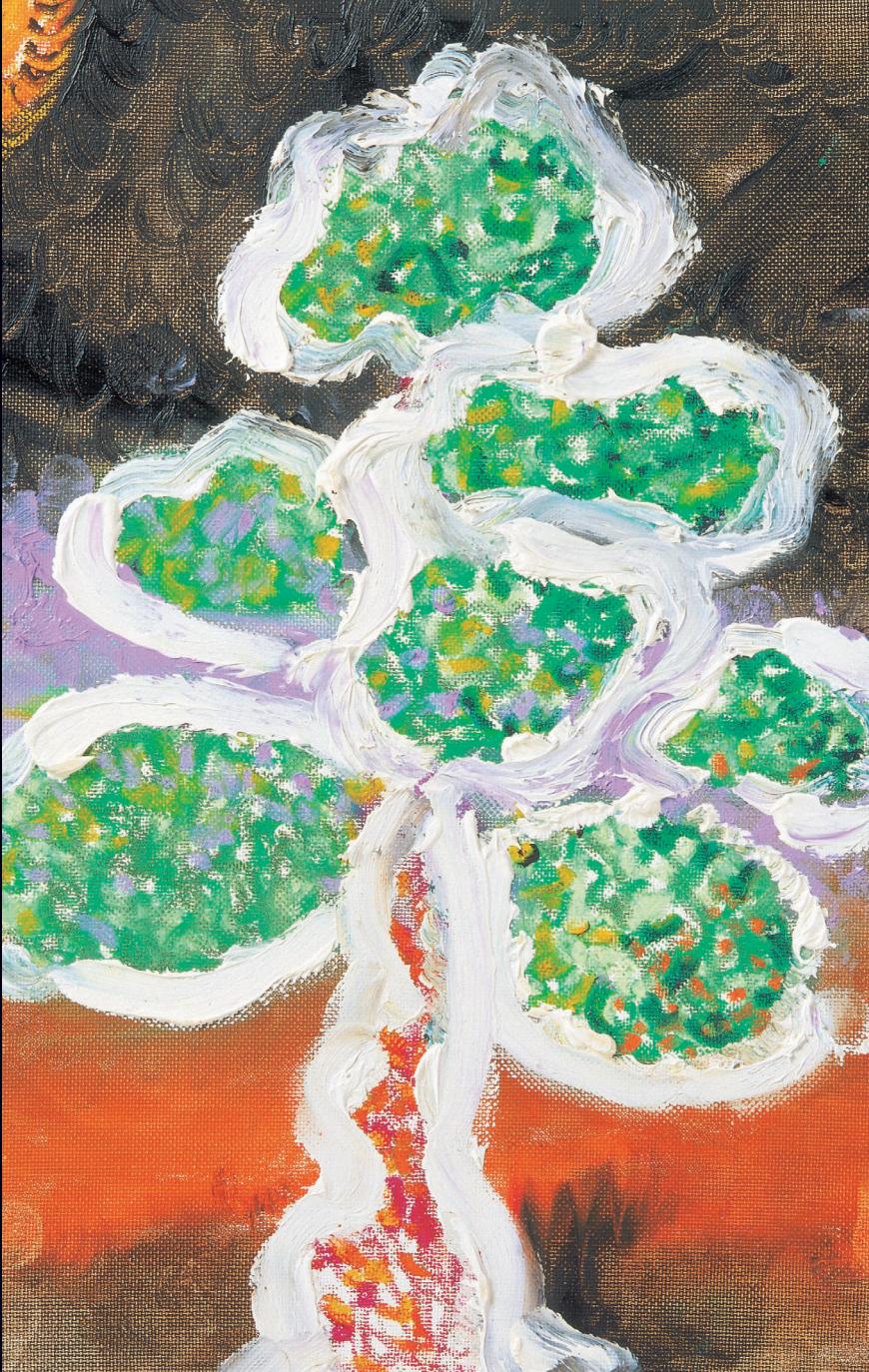
「ねえ、キョウチクトウのおかあさん

今年もまた、あのワンちゃんたちのお話をきかせてよ」

子どものハトからたのまれて

ゆっくりとキョウチクトウがうなずきました。

ヒロシマの夏に語られてきた
キョウチクトウのお話がはじまります。



このヒロシマに原子爆弾が落ちたとき
それから七十年間は草も木も
一本も生まれないと言っていたのよ。
それほどひどい荒れ野原になつたの。
でもわたしたちは不思議なことに

すぐ次の夏に立派な花をつけることができたわ。
それは、あのワンちゃんたちのおかげなのよ。

「そのワンちゃんたちって、何をしてくれたの？」
小さなカラスがキョウチクトウにきました。



「まで、まで、しづかにきくのじや」
年よりのカラスが言いました。

ふたたびお話がはじまりました。

原子爆弾が落ちたとき、ピカーッと光つて

ドーンとすごい音がしたのよ。

人間も動物も昆虫も木も魚も

あっという間にとけて死んだわ。

何キロもはなれたところにいたものや
建物の裏がわにいたものだけが

ほんの少し生きのびたの。

助かつたものもひどいやケドをしたわ。

つらそうな声で年よりのカラスが言いました。

「そうじや。ガラスの破片が全身につきささったり
羽がやけたりして、みんな死んでいった……」
「みじめじやった……」



「水をくれ。水をくれ。水、水、水……」

人間も犬も木もさけんだの。

ハトもスズメもネコも犬も、やけただれて

みんなヨタヨタと川の土手に集まってきたの。

わたしたちキヨウチクトウも

「助けて！ 熱い、熱い！」

「助けて……」と、ひっしごさけんだの。
枝も葉っぱもどんどん燃えてゆくの。

そのときだつたわ。

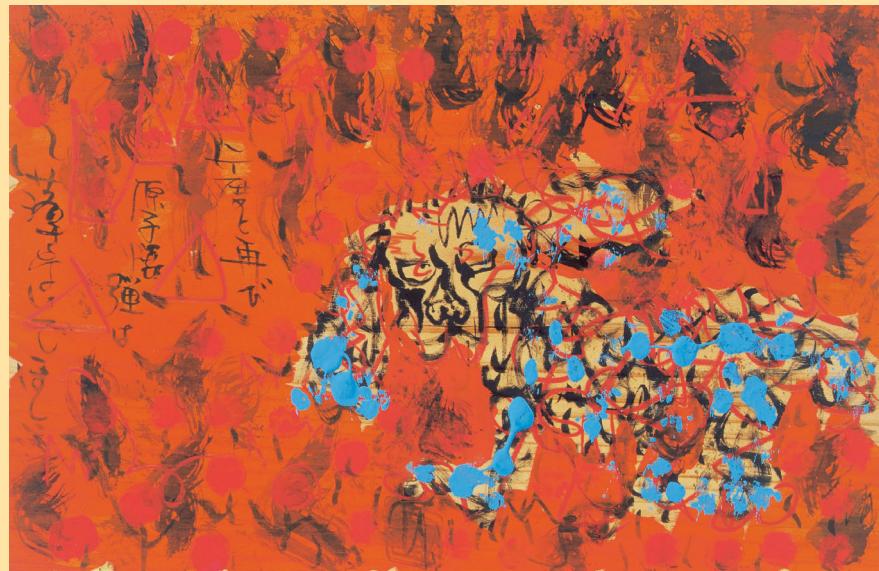
ヤケドで毛が半分くらいになつた

大きな犬が通りかかったの。

わたしは最後の力をふりしぶつて

「助けて……」と、その犬にさけんだの。

でもゆっくりとカラダをひきずるようにして
通りすぎていったわ。



川にいちばん近いところでやけていた

子どものキョウチクトウが

「おかあさん……おかあさん……」

とさけんで氣をうしなったの。

あの犬が足をとめてふりかえったわ。

やけて小さくなってしまった

子どものキョウチクトウを

じっと見つめると



空にむかって

「クオーン、クオーン」「クオーン」

と、鳴いたの。

まるで誰かをよんでいるような

遠く悲しい鳴き声だったわ。

その声を聞きながら

わたしもとうとう氣をうしなってしまったの。

どれくらいたつたのかしら、わたしが気がついたのは
ブル、ブルッ、と音がして

「しっかりしろ！」

という声がきこえたときなの。

あの大きな犬がもどってきて、わたしに水をかけてくれていたの。
川に入り水びたしになつて

なんども、なんども

カラダをブルブルッとふるわせて
水をかけてくれたの。

「ああ、助かるんだわ」

ジユ、ジユツと火が消えてゆくの

ゆめ
夢のようだつた。

ひんやりとした水のなんとありがたかつたこと。

「やつと気がついたね、もう大丈夫だいじょうぶだよ」

「ボクの鳴き声が仲間にもとどいたんだよ」と言つてくれたの。

あたりを見まわすと

たくさんの犬たちがつぎつぎと川に入り
水をしたたらせながら

あがつてくる姿が見えたわ。



の元に
抱かれて

子犬もいたわ。

川からあがれずに
そのまま死んで
流されていった

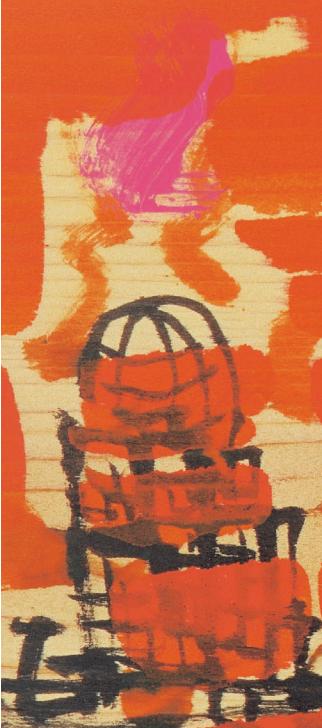
老犬もいたわ。

倒れても倒れても
立ちあがって
水をかけようとする
犬もいたわ。

「助かったわ」

「ありがとう」「ありがとう」
あちらでもこちらでも
キヨウチクトウの声が
きこえてきたの。
わたしたちはそうやって
救われたの。

でもね、犬たちはみんな、みんな
死んでいったの。



「ボクの分まで生きてね。

生きてね」

「このカラダで根っこを

守るからね」

「さあ、ボクを抱だきしめて

そう言つて田をとじたの。

……ここまでお話をすると

キョウウチクトウは

だまりこみました。

悲しくてお話が

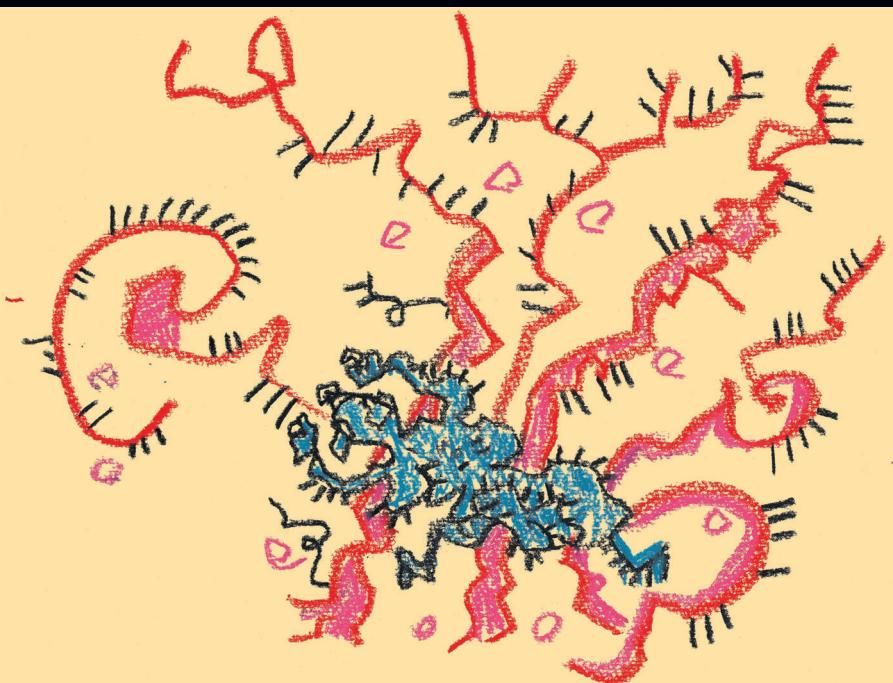
続けられなくなりました。

話を聞いているカラスが泣きました。

ハトも泣きました。

アリも泣きました。

みんな泣きました。

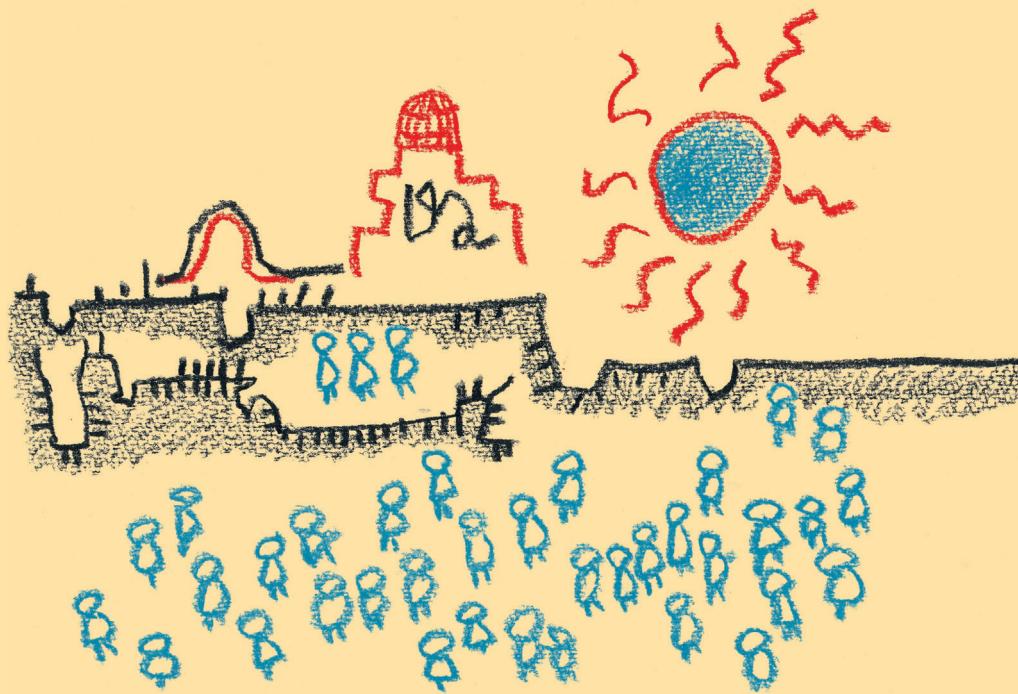


しばらくしてキョウチクトウは
氣をとり直してお話を続けました。

わたしの心の中にやきついているのは、この犬たちの目よ。
一度も水をかけられずに流れていった犬は、悲しそうにわたしを見て
次に空を見て、すうっと川に沈んでしまったの。

犬もお魚も人間も川底に折りかさなつて
同じようにゆっくりと流されていったわ。

「もうじやつた。
あの犬たちはがんばって、がんばって水をかけたなあ」「
みんなまっ黒になつて
根っこにおおいかぶさるよつにして
あちらでも、こちらでも
悲しい目をとじて死んでいったなあ」
と、クスの大木が低い声でつぶやきました。
ハトたちは毎年お話がここにさしかかると
元安川の川面かわもをじいっと見つめるのでした。
きらきら光る川波を見つめ、犬たちのことを思います。
浮いたり沈んだりして
がんばっているさまざまの姿が見えるよつです。



人間たちの平和の集まりは
いつのまにか終わりました。
その後、人間たちは公園の中の
それぞれの慰靈碑いわいひに
お参りをします。

でも、動物たちの慰靈碑は
どうにもありません。

そのときです。

キョウチクトウの枝をそつと引きちぎりはじめている少年に
みんな気がつきました。



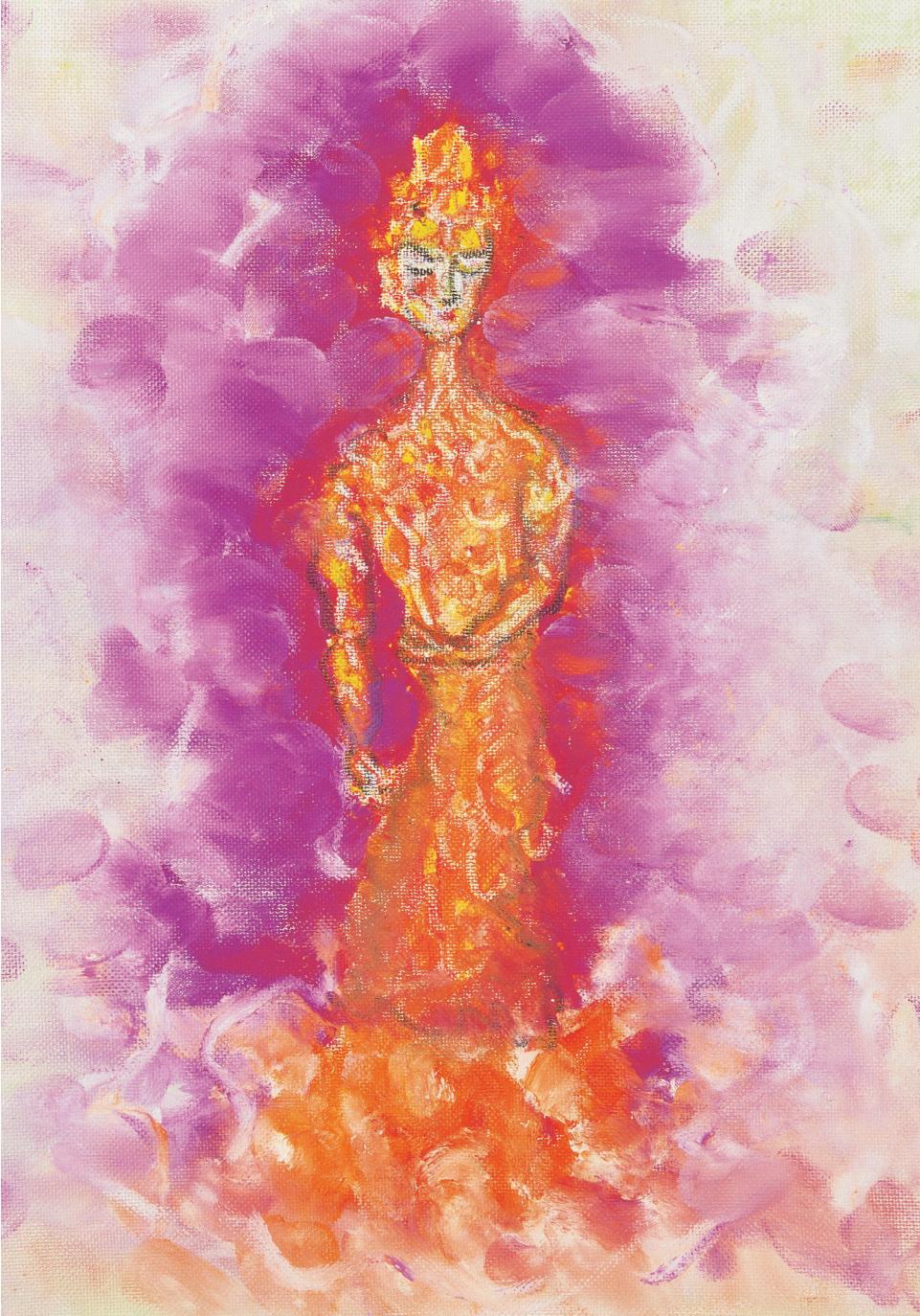


少年は立ちつくしたまま
しづかに泣いています。

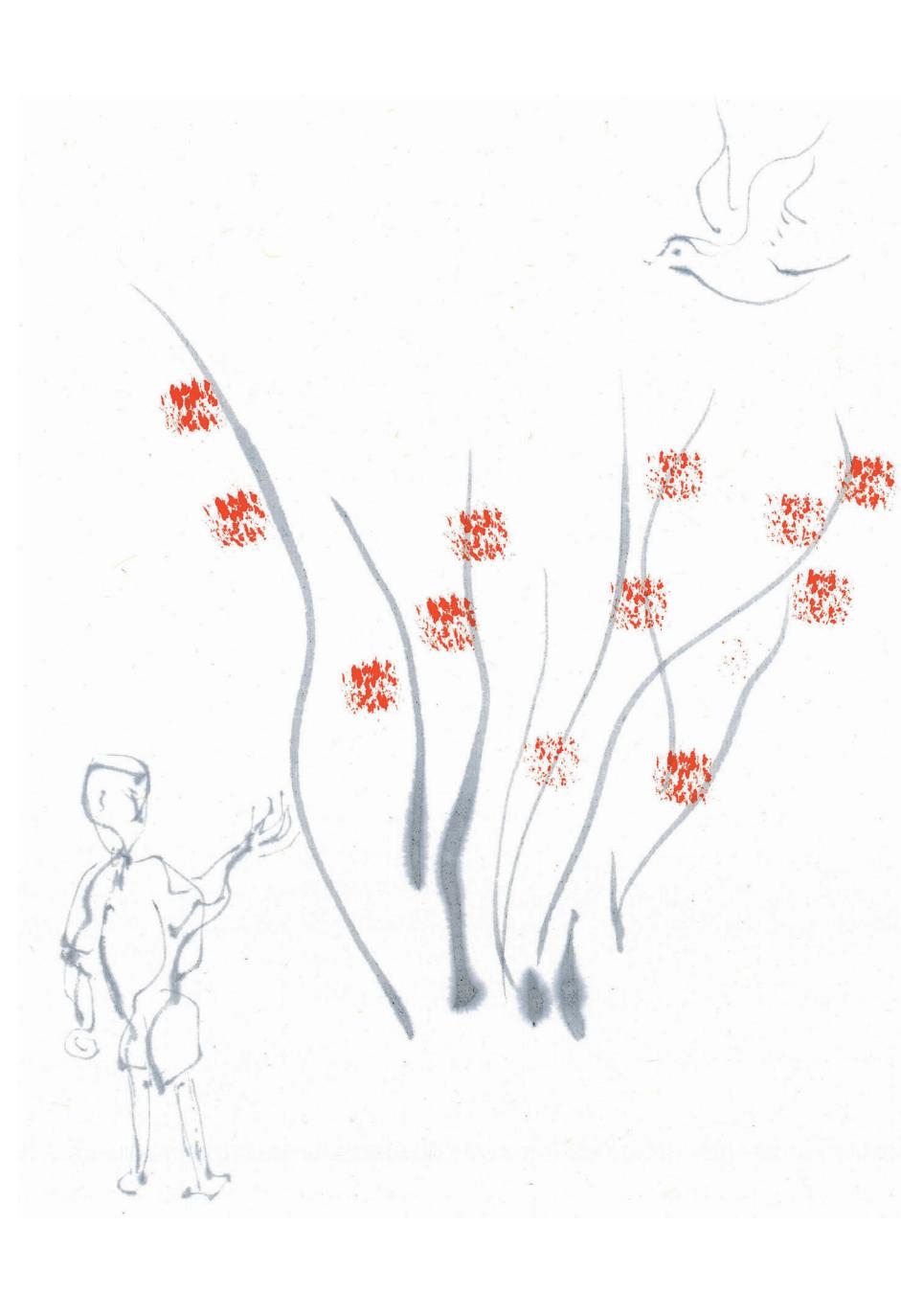
ハトがおどろいて

少年をよくよく見つめました。
カラスも少年を見つめました。

みんなこの少年の涙を見つめました。
セミたちは鳴くことをやめました。



たつた一人だけど
キョウチクトウのお話が
とどいたのでしょうか。



少年はキョウチクトウに小さな、小さな声で

ささやきました。

「わすれていてごめんね……」と

その言葉をきいたとき、公園の森にざわめきがおきました。

「希望」が生まれたのです。

キヨウチクトウはもちろんのこと

クスの木も大きく葉をゆすって喜びました。

ザワザワ、ザワザワ。



元安川のお魚は川面からとびはねて喜びました。

ピシャ、ピシャ。ピシャ、ピシャ。

セミの大合唱もはじめました。

ミーン、ミーン、ミン、ミン。

オーケストラのようにいろんな声が喜びをかなでます。

スズメもハトもカラスも、この生まれたばかりの「希望」を胸に
どこまでも大空を舞つてゆきました。

